

《日本研究所 研究プロジェクト報告③》

近代日本社会と文化の諸相―人・地・産業のネットワーク

亀井ダイチ・アンドリュウ

英語圏における日本近代史研究は、modernity という概念を中枢に据えた視点で理解していく傾向が根強い。それに対し、個々のケースが構成する顕在的・潜在的なネットワークに注目し、当時の社会における人・地理・産業等のつながりの存在とその役割について説明することによって、明治大正の時代の移り変わりの中での日本社会・文化・人々の思考や役割の変化とその意味を考えていこうとしたのがこのプロジェクトの目的であった。

当初の切り口として取り上げたのは、二〇一四年に世界遺産登録が決定した富岡製糸場とその絹産業遺産群である。富岡製糸場が近代日本の産業化を牽引する役割を果たしたことはつと

に知られているところだが、その設立・開業・経営母体の変遷においては、群馬県という限定された地域や糸産業のみではなく、様々な人物や産業が関与している。それは、世界遺産の認定をうけた対象が、注目を浴びがちな製糸場そのものだけではなく、それに関連する養蚕農家、伝統から革新技術を享受した教育機関、自然環境を利用した貯蔵庫としての風穴など、どれひとつも欠かせぬ構成要素として登録されたという点からも明白である。この富岡製糸場関連の基礎研究の一部は、二〇一四年十一月に行われた日本研究所講演会シリーズ「世界遺産からみる日本」の一環として報告し、学生の理解度を高める一助とした。

その後、富岡製糸場設置主任として、その設立に尽力した渋沢栄一の故郷である深谷市においてフィールドワークを行ったことをきっかけに、より視点を広げて明治・大正期の企業家のありよう、およびそのネットワークについても調査を進めはじめた。富岡製糸場は官営から払い下げられた後、三井・片倉と財閥の手にわたるが、非財閥系の企業の存在も地方経済活動及びその発展において、非常に重要なプレイヤーとしての役割を果たしている。また新しい事業を担った企業家たちの移り変わりを辿ると、そのネットワークが拡大していくことがあることが分かる。これら企業家についての研究の一部は、二〇一五年十二月に神田外語学院 Extension ビジネスセミナー「日本近代史にみる日本の企業家精神」において講演の形で行っており、また二〇一七年にも引き続き類似のテーマで講演を行うことになっている。